



お嬢様フォーシーズンズ

青橋由高

illustration © 天河憐人

美少女文庫
FRANCE  SHOIN



移りゆく季節と彼女たち

春。少年は今は亡き両親との思い出のつまった町をあとにした。

これからは誰に頼ることなく、一人で生きていかなくはならない。その覚悟はすでにできている。

不思議と不安はなかった。

少年を見送るように美しい花吹雪はなふぶきが故郷の空を舞っていた。

まるで、少年を待っている運命の出会いを祝福するかのように。

夏。銀の髪と青い瞳を持つ少女は、汗を拭ぬぐいながら大切な友達の世話をしていた。

「ごめんね、今、すぐにワラを換えてあげる。もうちょっとだけ我慢してて」

妖精のように美しいと称される顔が汚れるのにもかまわず、少女は熱のこもった厩きゅう

舎^{しや}で黙々と作業をつづける。

「ふふ、そんなにあわてないで。今日はキミの大好物のリングもあるからね?」

他人とのコミュニケーションは苦手な少女だったが、馬たちの前では別人のように明るい笑顔を見せる。友人どころか家族にすら見せない表情だったが、

「あの、よろしければ、お手伝いしましょうか?」

この日ふらりと現われた少年に、少女がその妖精の微笑みを見せるようになるのに、そう時間はかからなかった。

秋。小柄な身体に漆黒のマントをまとった少女は、新しく家族となる二人の間をそのつぶらな瞳に映していた。

義父となる男性は想像していたよりもずっと優しく、頼もしそうだった。

義姉となる女性は期待していたよりもずっと美しく、気品にあふれていた。

「わたくし、ずっと妹が欲しかったの。あなたのような可愛い子が妹になるなんて、嬉しいですわ」

少女も嬉しかった。こんな綺麗な姉が欲しかったから。

しかし義姉と初めて会ったこの日、少女はまともに話すことも、目を合わせることも満足にできなかった。

少女が義姉と本当の姉妹になるには、一人の少年との出会いを待たなくてはならなかった。

冬。金色の髪をした少女は、エメラルドグリーンの瞳に焦燥の色を浮かべていた。なかなか心を開いてくれない義妹を自分が通う学園のクリスマスパーティーに招待するはずだったのに、手違いがあつてチケットが確保できなかったのだ。

「どうしましょう。家族割り当ての分はもうお父様とお義母様に渡してしまつたし」娘に甘い父はもちろん、新しく家族となつた義母も少女が照れてしまうほど楽しみにしてくれている。今さらチケットをかえせとは言えない。

「僕のでよければ、チケット、用意できますよ？」

クラスメイトになつて半年、ろくに話したこともない男子生徒がそう申しでくれたその日のことを、少女は今も鮮明に覚えている。

自分たち姉妹の人生を変えてくれる相手だとは夢にも思わずに、少女は少年と出会つた。

季節は巡つて、二度目の春。栗色の髪をした少女は、掲示板に貼られた新しいクラス分けの名簿を見て頬をほころばせた。

（よかった、今年もあの人と同じクラスです！）
少女はもう一度その少年の名前を確認してから、軽い足取りで新しい教室へと向かう。

同じ部活に入っているのだから放課後になれば毎日会えるとわかっていても、やはり今年もまた一年、一緒の教室で過ごせると思うと心が浮かれるのをとめられない。少年と出会ったのは昨年の桜舞い散る季節。

少年への想いを意識したのは枯れ葉舞い散る季節だったろうか。

そしてまた、春がやって来る。

昨年と違うのは、少女は恋する乙女になっていたことだ。

桜が舞う春、少年と少女たちの物語が絡み合いながら、ゆっくりとまわりはじめる。